

ばんけい

教育ほつとにゅーす

かわら版

こ みち
教育の小径 No.104

2017 June

6月号

国士舘大学教授
北 俊夫先生

今月のひとば

情けは人の為ならず

人に親切にすることは相手のためになるだけでなく、巡りめぐって自分のところによい報いが戻ってくるということです。「人の為ならず」は「人のためにならない」という意味ではありません。

教師は学校で育つ

- 教師は校内での研修会をはじめインフォーマルな場において、同僚からさまざまな指導やよい刺激を受け、教師としての資質能力を高めています。
- 教師は子どもたちや保護者からの言動によっても育てられます。教師にとって、日々のあらゆる教育活動が自己研鑽の場だといえます。

重視したい同僚性

教師の資質能力の向上はいつの世も課題になっています。ここでいう資質能力は、先天的なものというより、本人の努力や周囲からの働きかけによって後天的に習得され向上されるものとされています。教師の資質能力の中心は授業力であり、生徒指導力であり、保護者との対応力です。教育委員会ではさまざまな研修の機会を設けています。研修会に参加することによって指導技術を学び、新しい情報を入手したり、心を新たにしたりすることができます。こうした機会はこれからも有効に活用したいものです。

「教師は学校で育つ」といわれています。各学校において、校内研修の充実が求められていますが、それは計画的に実施されるフォーマルな場だけではありません。インフォーマルな場でも、優れた指導技術の伝達が行われます。例えば、休憩時間や放課後の何気ない会話から多くのことを学ぶことができます。廊下を歩きながら、他の学級の掲示物を見たり教室を覗いたりすると、新たな発見をします。

また、同僚の先生方との日常の話し合いから、貴重な指導方法や考え方を学ぶことができます。新しい情報を得

ることもできます。同僚性を重視することによって、教師は人間性や指導力を高めていきます。そこでは、日ごろ共通に接している子どもたちを対象に話題が展開されます。子どもの課題を共有し、その解決策をともに考え、共通に実践しようとし、子どもの実態からスタートして子どもへの指導に返すことを実地に行うことができるので、これを私は「研修の地産地消」と言っています。

教師は子どもに育てられる

教師は「教育」の文字のとおり、子どもに教え子どもを育てる立場にあります。ところが、子どもに教えているはずの教師が、授業中、子どもの発言を聞きながら「そのような見方もあるのか」「そのような考えは予想もしていなかった」などと気づくことがあります。これは教師が子どもから教えられる場面です。また、子どものつまづきに接して、教師は指導方法を工夫・改善しようと努力します。このことは、教師が子どもに育てられることを意味しています。

教師は子どもから教えられることによって、一段と成長していきます。そのためには、教師自身に謙虚な姿勢が求められます。学ぼうとする姿勢を

もっていないと、貴重な場面に接してもその価値に気づくことができないからです。日ごろから、子ども一人一人に対する限りない愛情をもち、受容するふところの広い、寛容な心をもって子どもたちに接することが大切です。

保護者の「苦言」を糧にして

教師は同僚や子どもたちから育てられ、資質能力の向上が図られるだけではありません。保護者のひと言から教師が成長する機会を与えられることがあります。時には耳の痛い言葉を浴びせられることもあるかもしれませんが。それを「苦情」としてとらえるか。自分に対する「励まし」や「期待」ととらえるかによって、その言葉の受けとめ方が変わってきます。

ホテルの経営者は「お客さんの苦情から経営の改善点に気づく。苦情は経営の宝だ」といいます。苦言をポジティブに受けとめ、成長戦略に生かしている姿勢に学びたいものです。

保護者のひと言によって教師は育っていくととらえると、心が和らいでいきます。寛容な姿勢に変わっていきます。教師は校内や地域の同僚だけでなく、子どもたちはもとより、保護者や地域住民にも支えられ育てられながら成長していきます。

今月の
記念日おまわりさんの日
(6月17日)

明治7年(1874年)のこの日に、日本で初めて巡査制度がつくられました。このときに、おまわりさん(警察官)が誕生しました。

学校の危機管理

安全点検

危機管理の原点は未然の予防です。学校における予防対策の1つに校舎内外の定期的な安全点検があります。

例えば、体育館の体育用具にゆりみや破損はないか。理科室の薬品倉庫に鍵は掛かっているか。廊下や壁などに釘の出ているところはないか。窓ガラスが割れたりひびが入ったりしているところはないか。非常階段や消火器、非常ベルはいつでも正常に使用できるようになっているか。校舎の外側にゴミが散らばっていないかなど、観察する箇所と視点を設定しておきます。

また、地域にも目をやり、事故の起こりやすいところはどこか。特に通学路や遊び場、人通りの少ないところや用水などの様子を観察します。事故や事件の起こりそうなところを地図に表し、校内に掲示して注意喚起します。

このような校舎内外の安全点検は、毎月「安全点検の日」を決めて、定期的に行います。点検箇所は複数の教職員が分担して行い、月ごとに変えます。いろいろな人たちの目で観察することが重要です。そのためには「安全点検カード」を作成しておきます。

安全点検は教職員だけでなく、子どもたちに実施させると、安全意識をさらに高揚させることができます。地域を安全点検するときには、保護者や住民の協力を得ながら実施するとよいでしょう。教師が気づいていない新たな情報を得ることもできます。

こうした取り組みは事故の未然の対策と防止につながるだけでなく、日ごろから危険を察知し、事故防止に努めようとする姿勢を養うことにも貢献します。何よりも学校や地域に「安全文化」を構築することが期待できます。

教育の動向



学校安全推進計画

正式には「学校安全の推進に関する計画」といいます。これは学校保健安全法にもとづいて5年ごとに策定されます。平成24年度からの「計画」は昨年度終了しました。過日閣議で決定された、本年度からの第2次計画は、昨年12月に中央教育審議会から答申された「第2次学校安全の推進に関する計画の策定について」の内容に沿ったものになっています。

「答申」は「今後の学校安全の方向性」を提言しています。まず「目指すべき姿」として、すべての子どもたちに安全に関する資質・能力を身につけ

るとともに、学校管理下の死亡事故発生件数をゼロにし、負傷・疾病の発生率を減少させるとしています。

これを受け、学校における安全に関する組織的な取り組み、安全に関する教育の充実方策、施設及び設備の整備充実、学校安全に関するPDCAサイクルの確立、家庭、地域、関係機関等との連携・協働による学校安全の推進の5項目をあげ、12の施策目標を設定しています。さらに、各項目を推進する具体策を示しています。

学校安全は生活安全、交通安全、災害安全を対象にしています。国が策定した推進計画は、各学校に義務づけられている「学校安全計画」や「危機管理マニュアル」を作成する際のよりどころとなるものです。

シリーズ 研究授業の目 12のポイント 8

何を学ばせているか

授業を観察していると、つい子どもの活動に目が行きがちです。子どもたちが主体的に活動することは重要なことですが、授業を観察している「教師の目」はそれだけではありません。授業者はここで何を子どもたちに学ばせようとしているのかが気になります。

たびたび「活動あって学びがない」などといわれてきました。こうしたことが指摘されるのはどうしてでしょうか。それには次のような背景があると考えられます。

まず、授業者自身が活動をとおして「何を」学ばせたいのかを明確にもっていない場合です。授業者のほうに期待するものがないと、子どもの発言に対して何のリアクションもできず、ただ発言させているだけになってしまい

ます。不十分な内容であるときに、正そうとする手だてが打てません。

次に、学習指導案に学習活動ごとに押さえたい学習内容が書かれていないことです。そのため学習活動が子どもの意識に沿って展開されず、活動に連続性がなくなることがあります。活動が木に竹を接いだ恰好になります。

さらに、教師の言葉かけを分析すると「～しなさい」といった指示が多いことに気がつきます。子どもはそれに従って動きますから一見活動的に見えます。ところが、発問が構成されていないため、思考や理解を深める場面がありません。「授業者はここで何を学ばせたいのか」と疑問が残ります。

指導の目標（ねらい）はいかに指導するのかという「方法」と、何を指導するのかという「内容」から構成されることを改めて確認したいものです。

INFORMATION

ぶんけい 夏休み教材 検索

夏休み前までの復習に ぶんけいの選べる夏休み教材



基礎・基本から活用まで

編集後記

秋に実施されることの多かった運動会、最近はこの時期に実施するところが増えてきました。

事故のないよう事前の安全点検に努め、万全を期して当日を迎えたいものです。(F記)

企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2017年6月1日